

権田俊一の



Mountain.8

## 「丹波分水嶺・向山連峰」

—本州で最も低い分水嶺、それを囲む山—

本州に降った雨は、ある境界の片側は太平洋に流れ、反対側は日本海に注ぐ。この境界は山の尾根が多いことから、分水嶺といわれているが、盆地のような平坦に思えるところにも存在する。この場合は谷中分水界（こくちゅうぶんすんかい）と呼ばれる。

この境界の標高が本州で最も低い95mのところ、兵庫県丹波市氷上（ひかみ）町の石生（いそう）地区にある。この地区の上流の場所を取り囲む山並みが、向山（むかいやま、569m）連峰である。



丹波分水嶺と向山

この分水嶺を訪ね、向山に登る目的で、2015年1月5日（月）に妻の伸枝と宝塚の自宅から車で出かけた。水分れ公園下流の駐車場に着いたが、登る前にトイレへと、まずは水分れ公園まで歩いた。一月の始めでまわりはかなりの雪があるが、歩くのにはそれほど支障はない。水分れ公園の近くには、向山登山口と書いた矢印のついた道標があり、さらに先を指している。獣除けの大きな網戸をくぐって先に進むと、左の急斜面に向かって登山口と書いた道標がある。その方を見ると、道ははっきりせず相当な急勾配。これはやめた方がいい、と話していたら、案内書にもっと手前の登山口が書いてあったことを思い出した。

そこで駐車場付近へ戻って観音堂登山口へ向かった。時間はもう11時近かった。40分も水分れ公園付近にいたことになる。ちょっとした広場（庭）に小さな観音堂があり、その横が登山口だ。ここから山道に入る。

落葉で茶色になった斜面を登ってゆくと、「滝山古墳」の立て札がある。地図で二の山と書いてあるすこし下のところだ。説明では、「この古墳は標高298mの滝山山頂下に位置しており、昭和33年に偶然発見され、石棺内部から男性人骨と鉄剣などが見つかった。その後平成3年に発掘調査を行ったところ、もとは石棺内面や蓋石裏面には赤色顔料が塗布され、石材のつなぎ目などは粘土で目貼りした密封状態であったことがわかった。新たに銅鏃（やじり）、鉄鏃、鉄槍などが見つかったことから、この古墳は古墳時代前期後半の約千六百年前に造られたものではないか」とある。

そこから少し登って二の山に着いた。山頂の標識には標高298mと書いてあるので、これが滝山であろう。ここには四等三角点がある。地表は雪で白い。木々の間から南にある剣璽山（けんじやま、416m）が見えた。

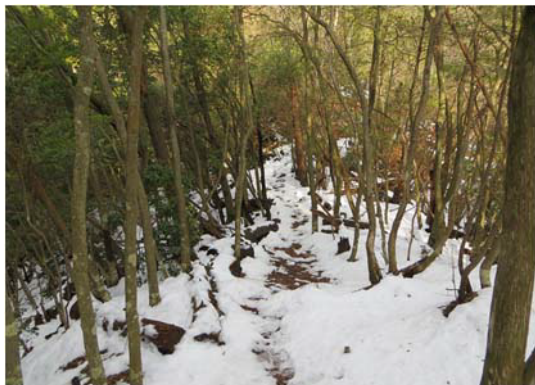
二の山から20分ほど登ると、分岐があった。このときはあまり意識していなかったが、ここが水分れ公園へ直接つながっている道だった。

分岐から5分ほどで岩坐（いわくら）展望所だ。文字通り、岩がつらなり、松が生え、その向こうに氷上、柏原の町が見える。岩坐（いわくら）展望所から少し歩くと、岩の尾根になり、少し登ると手を使わないと登れないくらい急になった。後から来た伸枝が「すこし厳しいんじゃない？」という。あまり気にしないで登っていたが、そう言われてみると一般道にしては急すぎる。下を見ると雪に覆われてよくは見えなかったが、道らしきものが見える。そこへ下りてみるとやはり道だった。伸枝は、

それ見たことか、という顔。その道を通って上部に出ると、先ほどの急な道と合流した。まもなく三の山（470m）に到着。12時20分だった。まわりの木には雪は着いていないが、山頂は雪だった。

三の山からロープを張った急な岩の道を下り、尾根らしい尾根を歩く（左下写真）。この尾根も分水嶺だ。南側に降った雨は瀬戸内海に、北側に降った雨は日本海に注ぐ。垂炭展望所を過ぎると、四の山（511m）だ。まわりの景色も見えるようになる。時刻は12時50分。ここで昼食にした。13時20分出発。

やがて道からすこし外れた小高い場所にある松の台展望所に出る。四月から五月にかけては、ヒカゲツツジやベニドウダンがきれいだそうだが、この時期はまだ小さなつぼみと枝があるだけだ。



三の山からの尾根



黒井城跡のある猪ノ口山（正面）

向山への道からは、右上の写真のように、北東に黒井城跡もはっきり見ることができる。黒井城は標高357mの猪ノ口山の山頂に本丸、二の丸、三の丸があり、周辺にいくつもの曲輪がある要塞化された城であった。築城主は足利尊氏の配下だった赤松定範である。その後城主は萩野秋清に代わったが、赤井直正（細川春元派）に暗殺された。赤井直正は一旦は織田信長に従ったが、その後敵対することになり、明智光秀との戦いの最中に病死し、黒井城は明智のものになる。明智の重臣齊藤利三がこの地を治めたが、明智が山崎の戦いで敗れると、黒井城には羽柴秀吉の家臣堀尾吉晴が入った。その後、徳川家康との間で戦が起こると、赤井直正の弟赤井時直が家康に通じて立て籠もった。この後黒井城は廃城になる。このように黒井城は戦いや城主の交代も多い歴史の波にもまれた城だった。右上の写真では縮小して載せたため、はっきりしないが、肉眼では頂上部の平坦な場所もはっきり見え、過ぎし昔を偲ぶことができる。

丹沢野林道への道を左に分けるところには「分水界 雲海の径」という標識がある。深坂北峰521mを過ぎると、向山頂上への登りになる。坂には雪が積もり、前に歩いた人の八本爪のアイゼンの跡が残っていた。私達もアイゼンは持っていったが、時間も遅く、雪も柔らかくなっていたので、アイゼンはつけずに歩いた。間もなく頂上である。時刻は2時になっていた。やや開けた平らな場所で三角点がある。左下の写真。一部は樹木がなく、黒井城跡や町がよく見えた。



向山頂上



中央分水嶺下部

案内書には、ルートとして更に先に進み、五の山、清水山、剣璽山、鳳翔寺を経て駐車場に戻るようになっているが、時間も遅くなったので、引き返し、水分れ公園に直接出る道をとることにした。戻るとき、登ってきた四の山や三の山が意外に大きいので驚きながら歩いた。岩坐展望所を過ぎるとすぐに水分れ公園への分岐である。ここで尾根が二つに分かれ、右に行けば、二の山、まっすぐ進めば、水分れ公園である。前の

地図に中央分水嶺と書いたところで、五の山から続く分水嶺をそのまま通って水分れ公園に行くことになる。

この道は、下り始めは傾斜もゆるやかで歩きやすかったが、最後になって傾斜が急になり、一応ジグザクに、ロープを張ってあるが、地面はぬかってぐちゃぐちゃでとても道とは言えない悪路になった。右上の写真。後ろを見ると伸枝は悪戦苦闘している。それでもなんとか下の道路に下り立った。午前中に登りかけてやめた地点だった。「朝ここを登らなくてよかった。」伸枝の率直な感想。

尾根が盆地に下りたところが水別れ公園だ。谷中分水界が始まるころだ。分水界を象徴的に示すために、園内を流れる高谷川を人工的に分岐させたところが下の写真である。左に行く水は由良川を経て日本海へ、まっすぐ進む水は加古川を経て瀬戸内海へ注いでいる。



水分れ分岐点

左の写真で伸枝が横を向いているのは、二人連れの年配の女性に声をかけられたからだ。ウォーキングポールを持って歩いている。運動のため。毎日ここに来ているそうだ。一人の女性は今年78才になるという。なんと私と同じ年だ。少し下にある資料館に勤めていたという。私達も行ってみよう、という、「きょうは月曜でやすみ。かわりに私が説明してあげる。」という谷中分水界のことを説明してくれた。95mの分水界最低地点はもっと下の福知山線の線路の先だそうだ。地元の人と交流できるというのは嬉しいことだ。

園内に「いそべ（いそは、山へんに石、べは部）の岩清水」というのがある。私も水筒に入れ、家に帰ってから、焼酎の水割りにして飲んだ。柔らかな口あたりでおいしく飲めた。あとで写真にとった説明文を見ると、生水は飲むなと書いてある。焼酎と一緒に飲んだから、まあ、いいか。



いそべ神社



沈む夕日

近くにいそべ神社がある。左上の写真のように、鳥居も本殿も立派な造りだ。説明文を読むと、神社の後ろにある剣璽山は三角形の美しい形をしている。そこで神様の山とあがめ、山上近くにある大岩は、神様が天から下りてくる岩（盤座）と考えた。その山の前に建てられたのが、いそべ神社だという。この付近のいそべの民は大きな岩を使って古墳を造ったり、たんぼをつくったりする土木工事が得意な人たちだった。その祖先、奇日方命（くすひがたのみこと）を祀ったのがいそべ神社で和銅三年、千三百年くらい前のことだそうだ。

いそべ神社の西側は、右上の写真のように、池と山の向こうに沈む夕日が美しかった。